

財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告会資料

かわひら

川平第1号古墳 (庄原市口和町常定)

つねさだかわひら

常定川平1号遺跡 (庄原市口和町常定)

つねさだかわひら

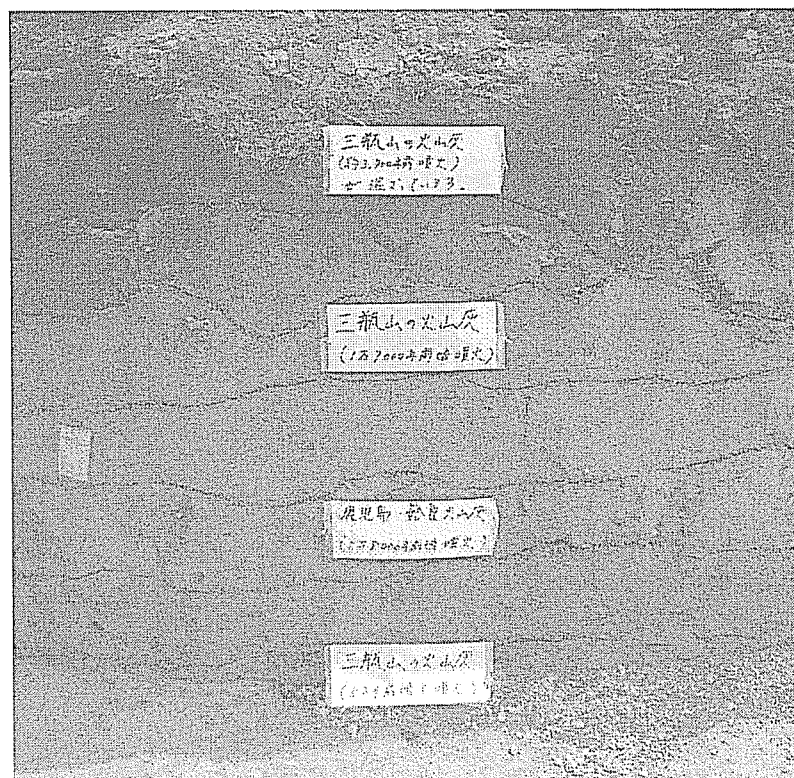
常定川平2号遺跡 (庄原市口和町常定)

むこういすみかわひら

向泉川平1号遺跡 (庄原市口和町向泉)

むこういすみかわひら

向泉川平2号遺跡 (庄原市口和町向泉)



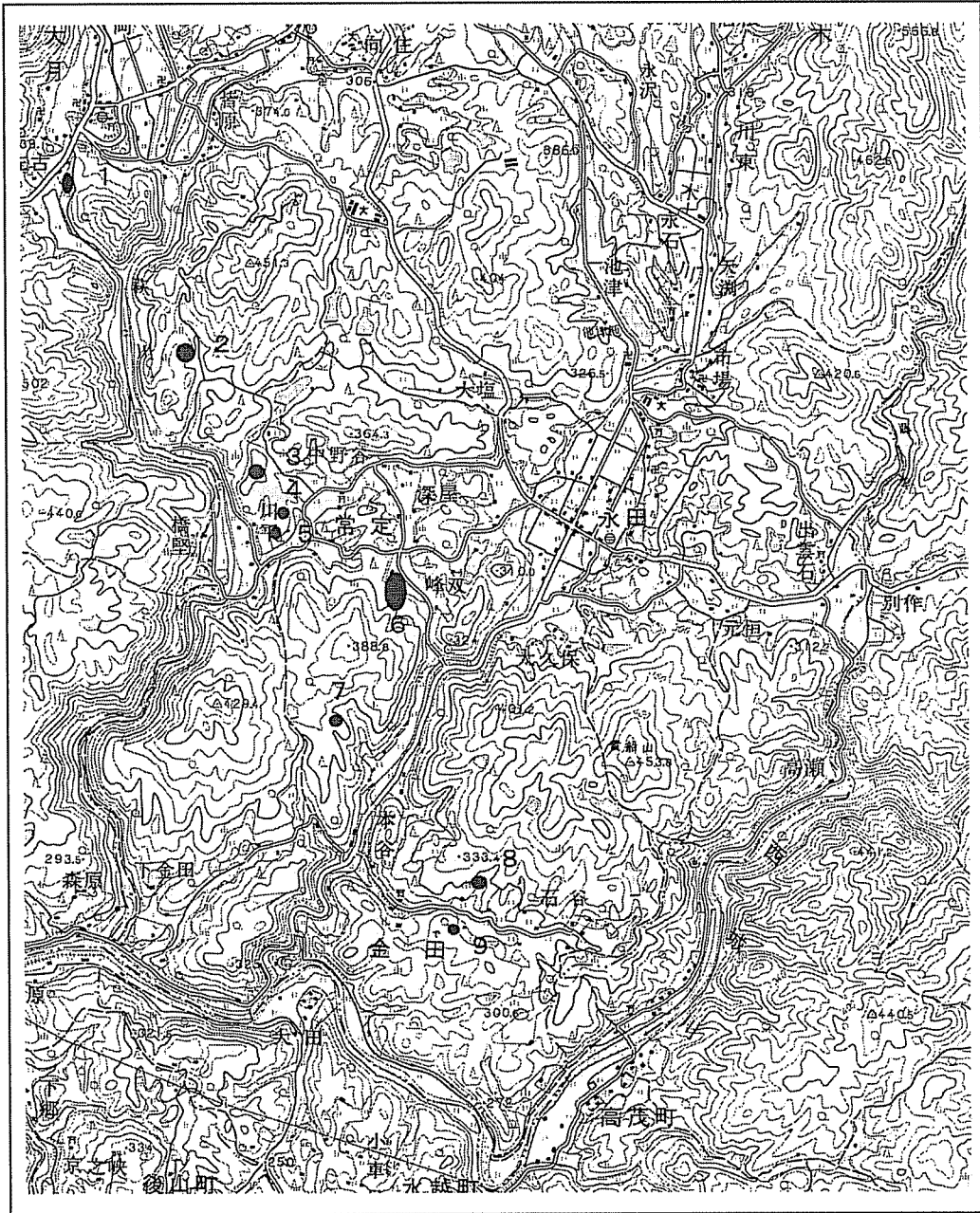
向泉川平1号遺跡土層断面

と き 平成20年7月26日(土)

ところ 庄原市口和文化ホールヒューマンライツ

## 1 遺跡周辺の環境

庄原市街地から南西方向に流れ三次市内で江の川と合流する西城川は、途中で多くの支流と合流しています。こうした支流の一つである萩川は、口和町大月地区において高野町に源を発する竹地川と比和町に源を発する大草川とが合流し萩川となり、直線距離で約 5.5km の狭長な谷あい を蛇行しながら南方向に流れて西城川と合流しています。今回報告する各遺跡は、萩川から東側 に入り込んでいる谷に面した丘陵尾根上や、斜面に立地しています。



近年発掘調査された遺跡分布図(1:50,000)

- 1 稲干場第2～4・9号古墳
- 2 向泉川平1・2号遺跡
- 3 常定川平2号遺跡
- 4 常定川平1号遺跡
- 5 川平第1号古墳
- 6 常定峯双遺跡群
- 7 曲第2号古墳
- 8 金田石谷製鉄遺跡
- 9 金田第2号古墳

## 2 調査のまとめ

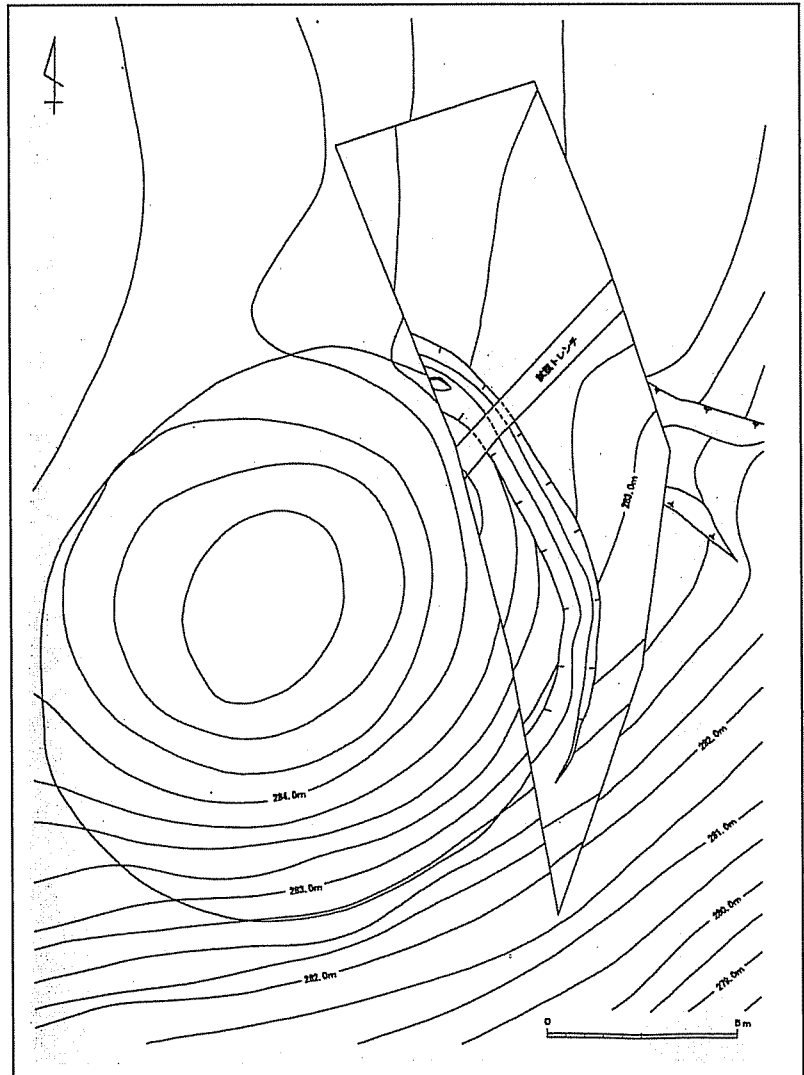
### (1) 川平第1号古墳

川平第1号古墳は、3基で構成される古墳群の1基で直径約13m、高さは東側の裾から1.8m程度である。発掘調査は、古墳の東側周溝部分を行いました。

周溝内から、副葬品であったと思われる土師器埴、須恵器短頸壺・杯蓋片・甕片が出土しています。

古墳の埋葬施設は墳頂部が平坦であることと、埋葬施設の部材と思われる石が周溝から出土していることから、箱式石棺か石蓋土坑であったと思われる、石材は周溝の中位にあったことから、築造後の早い段階で攪乱を受けていた可能性があります。

本古墳の築造年代は出土した須恵器杯蓋の形態から6世紀後半頃と考えられます。



川平第1号古墳地形測量図(1:200)



川平第1号古墳 土師器埴出土状況

## (2) 常定川平1号遺跡

遺跡は、東西方向の小谷最奥部に面した南側緩斜面に立地しています。

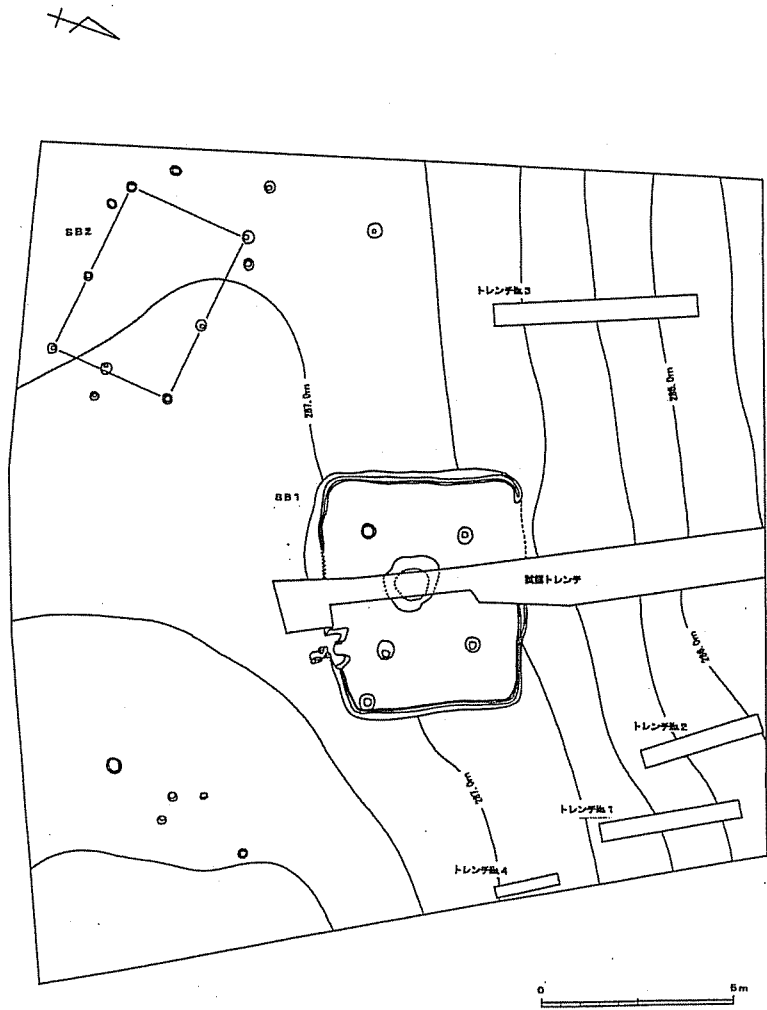
調査の結果、堅穴住居跡(SB1)と掘立柱建物跡(SB2)、柱穴状の小穴を11基確認しました。

SB1の規模は、東西方向6m、南北方向東側4.5m、西側5m、深さは南側で40cm、床面積は約25㎡です。

柱穴は4基で直径40~50cm、深さは床面から60~70cmです。南側壁の東寄りで見つけのカマドが見つかりました。

また、床面の南東隅で土師器甕3点が据えた状態、1点が据えた甕の口縁部上に横においた状態で出土しています。

SB1の時期は、出土した土器から古墳時代後期(6世紀中頃)と考えられます。



常定川平1号遺跡遺構配置図(1:200)



SB1遺物出土状況

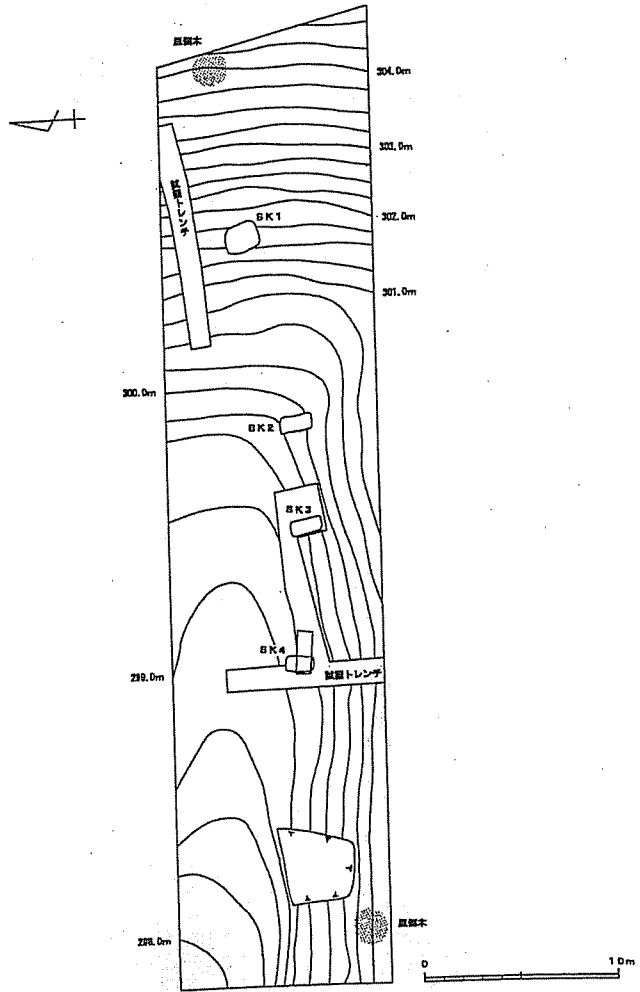
### (3) 常定川平2号遺跡

遺跡は、東西方向の小谷最奥部に立地しています。

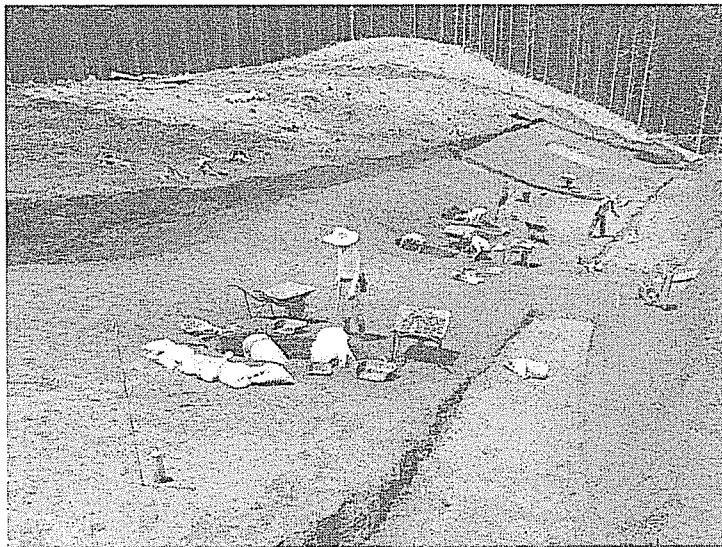
調査区内での高低差は約 6.5mあります。

調査の結果、4基の土坑を確認しました。土坑はいずれも長軸が南北方向で、SK1以外は谷の底近くで、斜面に対して直行して掘り込まれています。

遺物はSK1の下層から縄文土器と思われる細片が出土している以外は出土していません。これらの土坑の性格については、動物捕獲用の落とし穴を想定していましたが、土坑底面の平面形が明確な長方形であること、底に小穴が存在しないこと、壁の立ち上がりが垂直に近いこと、他遺跡で落とし穴と想定されている土坑と比べて浅いことなどから、落とし穴ではないと考えられます。性格としては墓坑の可能性が考えられます。SK1については、遺物が出土していることと立地条件が他の土坑と違うことから、落とし穴の可能性が残っていると考えられます。



常定川平2号遺跡遺構配置図 (1 : 400)



常定川平2号遺跡作業風景

#### (4) 向泉川平1号遺跡

常定川平1号遺跡から約1km北側の、南北方向に細長い丘陵の南東端に位置しています。

調査の結果、縄文時代前期(約7,000年前)・後期旧石器時代ナイフ形石器文化後半期(約17,000～28,000年前)・同前半期(約30,000年前)の3時期の遺構や遺物を確認しました。

各時期の遺構や遺物の内容は次のとおりです。

##### 《縄文時代前期(約7,000年前)の遺構と遺物》

遺物集中部4か所、集石遺構(しゅうせきいこう)5基を確認しました。

遺物集中部は直径6～9m程度の範囲内に、日常の使用の結果、壊れて捨てられたものと考えられる土器の破片、石器づくりの際に飛び散ったらしい石のかけらや石器の完成品・失敗作などが分布するものです。

集石遺構は、拳大～乳児頭大の石を数点寄せ集めたもので、多くの石は焼けて赤くなっています。民族例にみられる「石蒸し料理」等に使用された可能性が考えられます。

以上のことから、この遺跡では、縄文時代前期に集石遺構や土器を使った食べ物の調理や、石器づくりなどの活動を行った集落跡と推測しています。

##### 《後期旧石器時代ナイフ形石器文化後半期(約17,000～28,000年前)の遺構と遺物》

遺物集中部1か所を確認しました。遺物集中部は直径2m程度の範囲内に、石器づくりの際に飛び散ったらしい石のかけら(剥片・碎片)が分布するものです。出土したかけらの点数が少ないことから、短期間・小規模な石器づくりの跡と推測しています。

##### 《後期旧石器時代ナイフ形石器文化前半期(約30,000年前)の遺構と遺物》

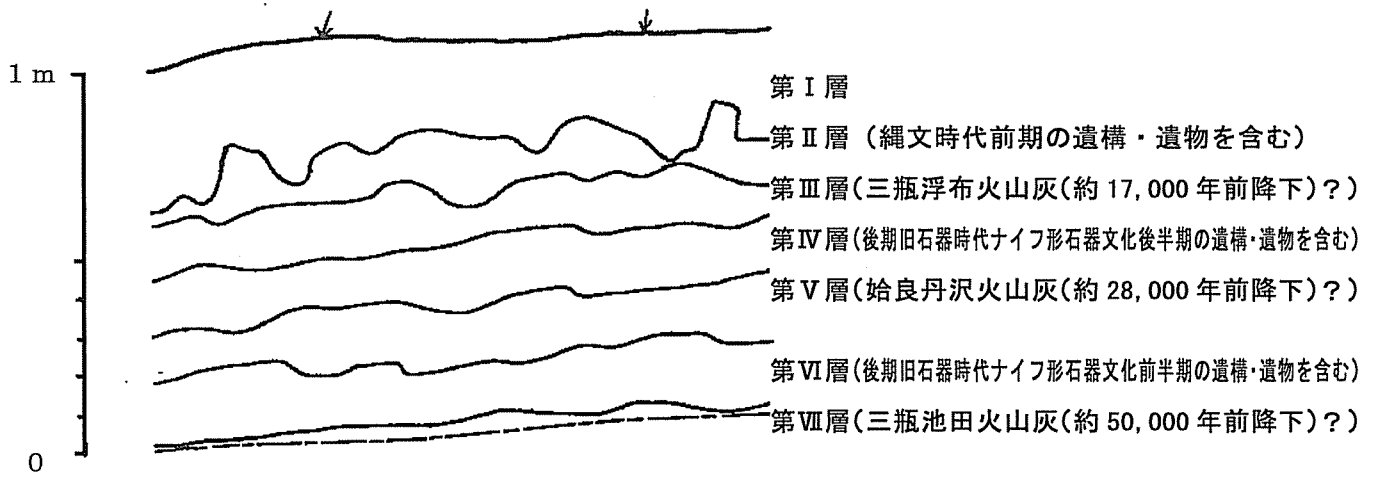
遺物集中部7か所、配石(はいせき)5基を確認しました。

遺物集中部は直径2～6m程度の範囲内に、石器づくりの際に飛び散ったらしい石のかけらや石器の完成品・失敗作などが分布するもので、配石は、拳大～乳児頭大の石が数点、数m四方の範囲内に分布するものです。

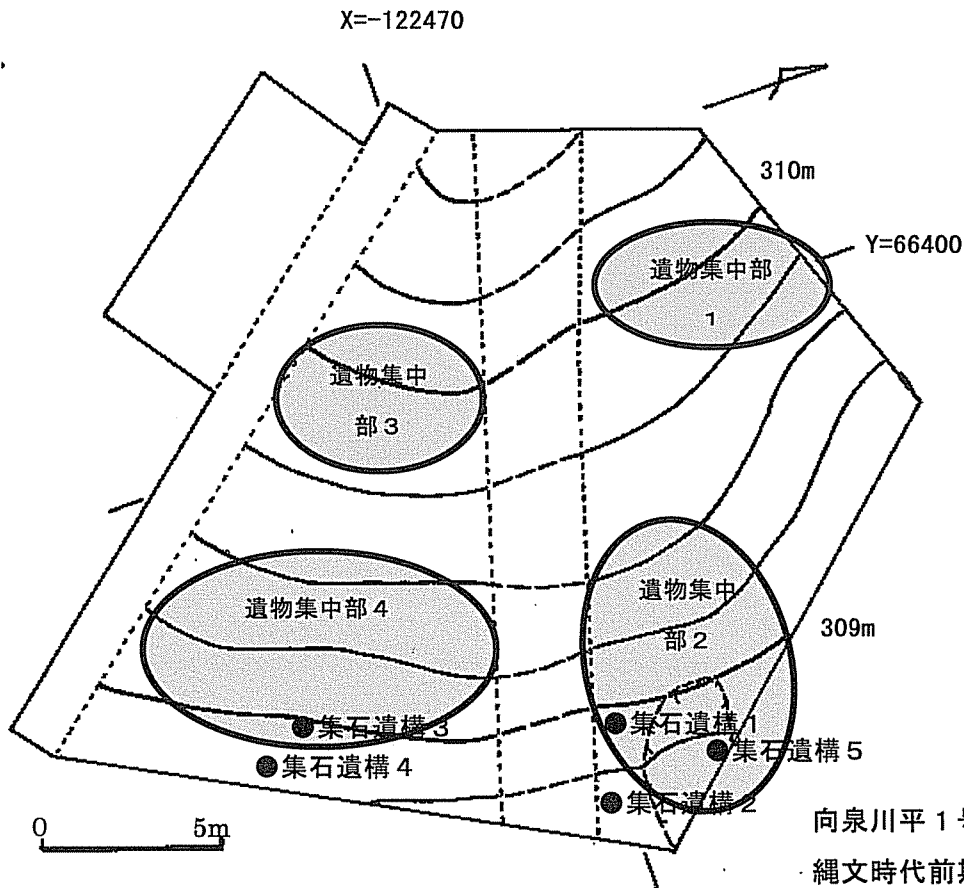
配石に用いた石は遺跡の近くを流れる沢から運び上げてきたと推定していますが、大きな石をいくつも運び込むには相当の労力を要すると推測されることから、この遺跡が単なる石器づくりの場所ではなく、一定期間生活・活動が行われた場所であることが窺えます。



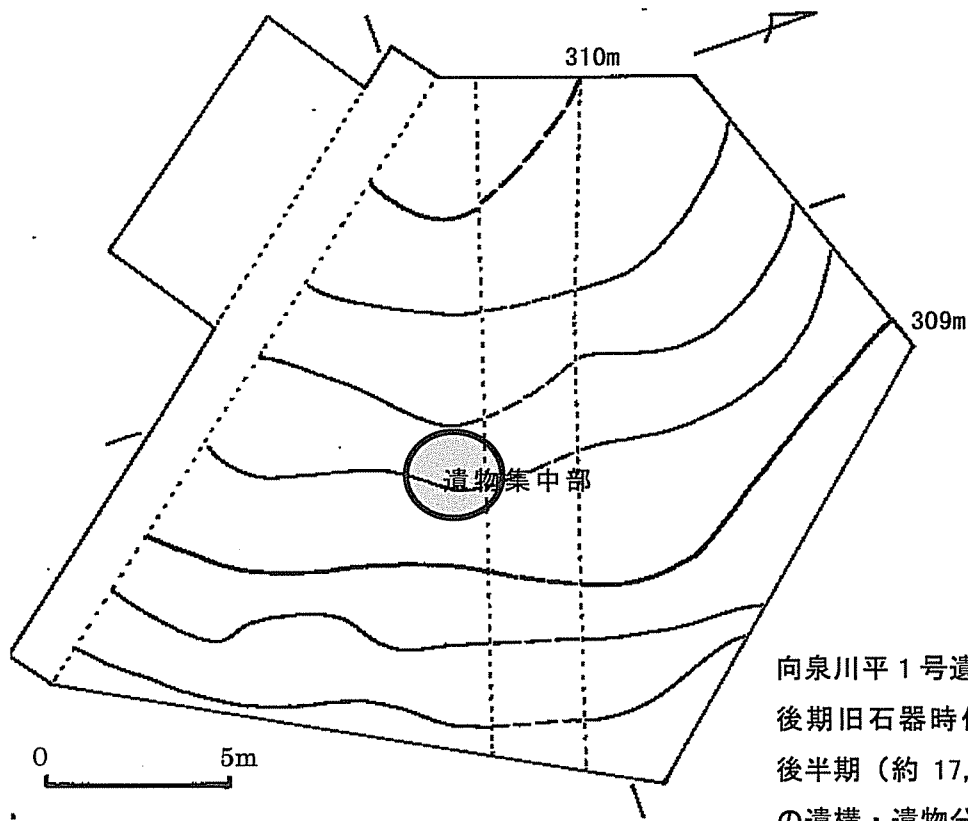
向泉川平1号遺跡 縄文時代前期の遺物分布状況



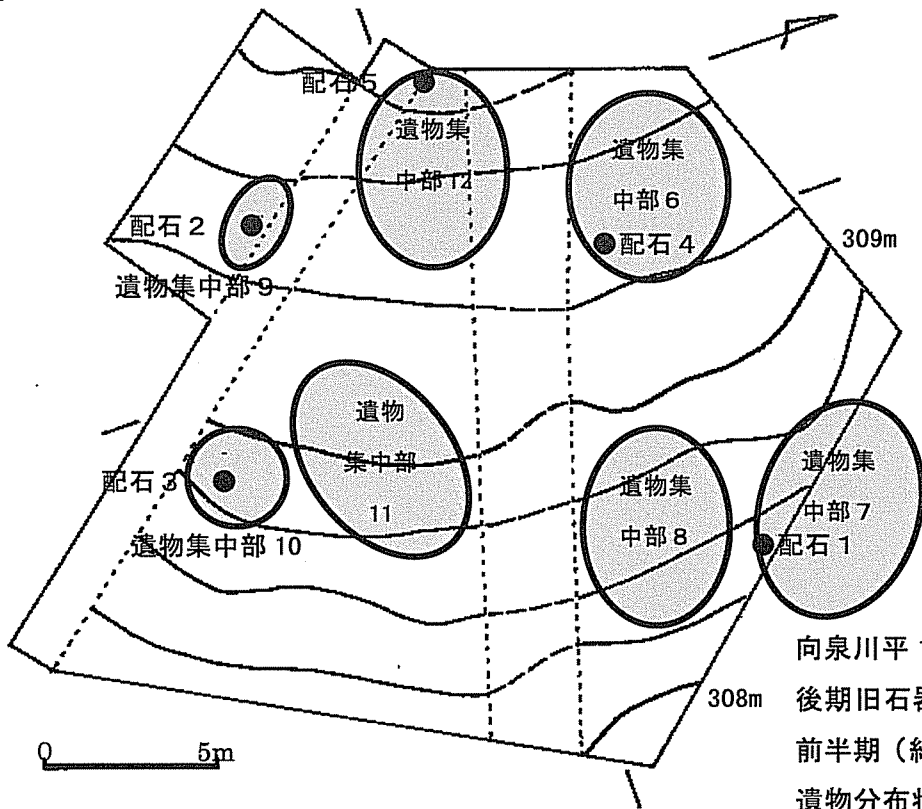
向泉川平1号遺跡 標準土層断面図(遺跡中央部付近, 1/20)



向泉川平1号遺跡  
 縄文時代前期(約7,000年前)  
 の遺構・遺物分布状況(概略)



向泉川平 1号遺跡  
 後期旧石器時代ナイフ形石器文化  
 後半期（約 17,000～28,000 年前）  
 の遺構・遺物分布状況（概略）



向泉川平 1号遺跡  
 後期旧石器時代ナイフ形石器文化  
 前半期（約 30,000 年前）の遺構・  
 遺物分布状況（概略）



## (5) 向泉川平2号遺跡

遺跡は萩川の左岸の低丘陵上に位置しています。今回の調査では、約 550 m<sup>2</sup>の範囲を調査しました。また、遺跡のすぐ南側には旧石器時代の包含層を確認した向泉川平1号遺跡があります。

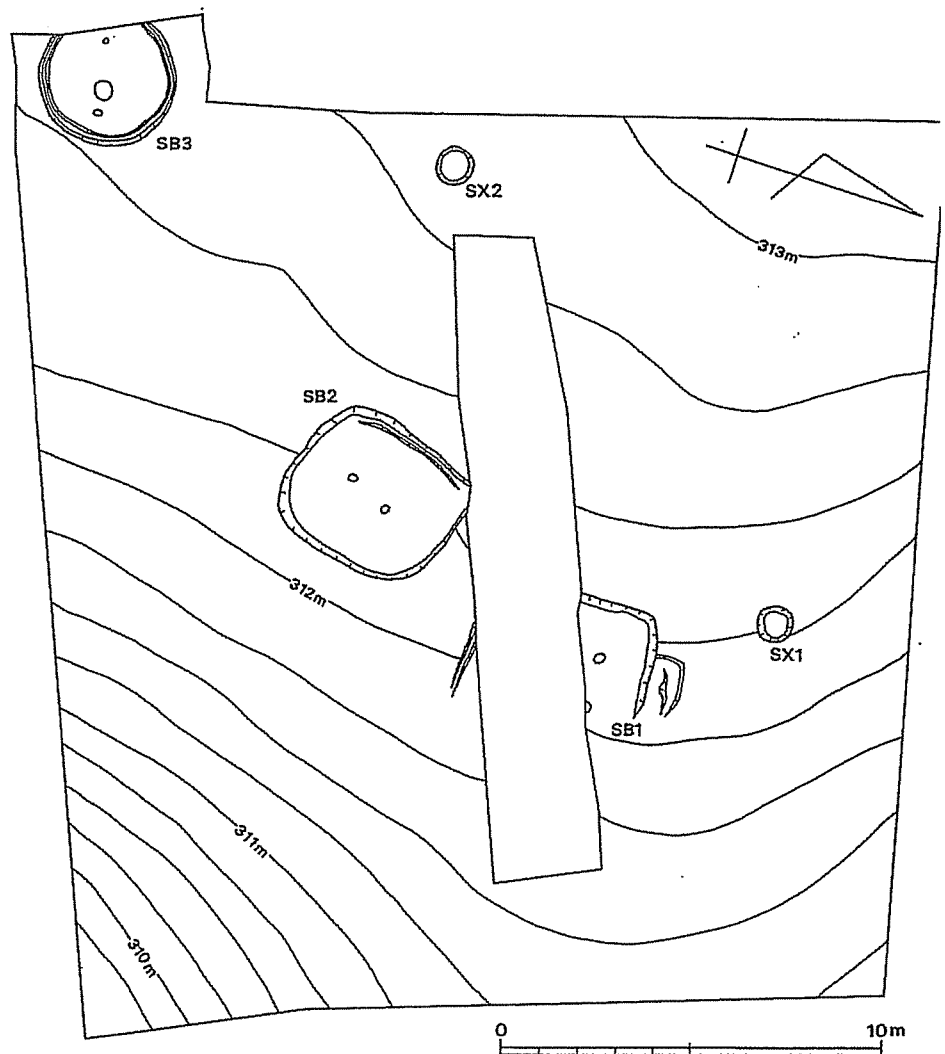
調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡1軒と古墳時代の竪穴住居跡2軒を確認し、また時代は明らかではない土坑を2基検出しました。

このうち弥生時代の住居跡(SB3)は、直径が約 3.5mの小型の円形住居跡で、出土した遺物から弥生時代後期後半頃のものと考えられます。住居跡の壁際には壁溝が廻っており、住居跡のほぼ中央で炉の痕跡を確認しました。支柱穴は2本で、床面は貼床したものです。また、この住居跡の内側からは炭化した住居の柱材や焼け土などが出土したことから、火災に遭遇した住居と考えられます。

一方、古墳時代の住居跡はいずれも隅丸方形のもので、SB3同様に焼失家屋です。このうち北側に位置する住居(SB1)は、その大半を試掘時に失われていることから詳細は明らかではありませんが、残存した柱穴から本来は4本柱であったと考えられます。また、床面は貼床したもので、貼床面を除去したところ、下から方形の土坑1基を検出しました。出土遺物としては、土師器や須恵器の破片があります。

また、調査区中央付近で確認した住居跡(SB2)は一辺が約 4mのもので、壁際には溝が一部廻っていました。支柱穴は2本で床面は貼床したものでした。この住居跡内からは土師器の甕、高杯などが出土したほか、半分に折れた砥石が出土しました。

以上、今回の調査から、当地域でも弥生時代後期後半から集落が形成されはじめ、古墳時代を通じて集落が営まれたことが明らかとなってきました。また、山間地域における集落のあり方を考えるうえで、貴重な資料を提供することができたと考えられます。



向泉川平2号遺跡遺構配置図 (1:200)